

論文紹介

瀧川政次郎氏「斉明朝における東北経略補考」(史学雑誌六七・三)

田名網宏氏「斉明紀『渡島』再論——瀧川博士の批判に答える——」

(同誌六七・二)

虎尾 俊哉

標記の二論文中、前者は瀧川氏が、先年「斉明朝における東北経略」(『余市』所収、昭和二八年)で提起された新説——斉明紀五年三月条の後方羊蹄は北海道の余市なり——がその後も学界に容れられないこと、ことに古代史談話会編の論文集『蝦夷』に全く無視されていることを憤し、その後青森県津軽地方実地踏査の知見を加えて補説されたものであり、後者はかつて「阿倍比羅夫の渡島遠征について」(『日本歴史六六』)を発表され、更にまた前記『蝦夷』中にも「古代蝦夷とアイヌ」と題する論考を公にされた田名網氏が、この瀧川氏の「補考」にこたえて依然として旧説——後方羊蹄は津軽地方——を守らざるを得ないことを再論されたものである。周知の如く、阿倍比羅夫の

遠征を伝えるこの斉明紀四・五・六年の記事については、書紀記事の信憑性——ことに大化以後の部分についてのそれ——をはかる材料として、或いは、蝦夷とアイヌとの関係を考える一つの手がかりとして、早くから注目され、研究されて来たのであるが、今回の両氏の論文は、斉明紀の史料批判については同じ立場で、比羅夫の遠征がほぼ書紀の記事に近い状態で行われたと解しておられるので、此点ではその点にはふれず、もっぱら有向・渡島・後方羊蹄などの比定地に関する部分を中心として両氏の論を紹介し度い。

先ず、瀧川氏の主張される処はこうである。

有向・渡島は比羅夫が北正より東へ進出して有向に至る

た所であつて、船艇を碇泊せしめるに便なる港灣であると共に、要害の地であり、且つ軍需の食料を幾分でも補充し得る場所であつたと考えねばならない。とすれば、この有向決に比定可能なものは、能代・深浦・鰺浜・十三・小泊・三廐の六港であるが、能代は淳代と表現されて斉明紀に存在するので有馬埃ではない。残る五港を実地及び海軍史料から検討すれば、結局、前記の如き北征の拠所としての立地要件を全て満たしているのは十三湊しかない。しかも、有向決はアルマの決と訓んでもよい筈である。このアルマは十三湊附近にあった私郡の名「瓊瑠磨」(江流末、江流洞、入向)に近い。即ち、エルマ、イルマはアルマの訛と考えられる。そして十三湊の北岸の相内の台地、即ち中世安東氏の福島城跡のある台地こそ比羅夫が有向決で陣營を營んだ地であらう。

処で、この十三から遙か沖合に出れば北流する大潮があり、これに乘れば易々として北海道神威崎に達する(三廐あたりから、津軽海峡を東流する潮流を横断して松前に渡ることは、和船では

困難である——従つて比羅夫が青森に赴くことは潮流の関係から云つて到底考えられないことで、「向決蝦夷」が「兎向蝦夷」の誤記で、兎向即ち青森の善知鳥であるという説の如きは言葉の遊戯——。従つて、肉入籠は多分北海道の松前・江差方面であらう。

次に、この肉入籠に至つた時に蝦夷が政所とすることをするためた後方羊蹄は余市町に外ならない。この後方羊蹄は古来シリヘシと読むことになっているが、これは後方をシリヘと訓読し、羊蹄をヌウテイと音読すべきもので、シリヘはシリパ山のヒンターランドを指し、ヌウテイはシリパ山麓の聚落イオチを指す。シリパ *Siripá* はアイヌ語「蛇多き処」の意、イオチ *Yotchi* はアイヌ語「蛇多き処」の意で、シリパ・イオチはシリパなる大地名とイオチなる小地名の複合であり、余市がアイヌ語イオチより起つたこと疑明かであるから、後方羊蹄は余市町に外ならない。従つて、勿論、渡島は北海道で、例えは、続日本紀養老四年正月条に見える「渡島津輕津司」は津輕海峡を横断して北海道

と津軽半島間を往復する船の発着場を監察する官司」と解釈するのが正しい解釈である。

以上が滝川氏の説であるが、これに対して田名網の友論される処は次の如くである。

日本書紀と続日本紀に見える「渡島」は北海道説が一般に安易に信ぜられていたが、これが秋田以北津軽地方を大体指していることは、津田博士がすでに論証された通りである。これを滝川氏は「色眼鏡で史料を見ている」とされるが、このような異論の生ずるのは鬼解の相違という外はない。従つて、例えば前掲の「渡島津駐津司」も「渡島の津輕の津の司」で「渡島地方の津輕のある港に設置されていた官司」と解して差支えない。

次に後方羊蹄については、シリヘ・ヤウタイという読み方をはじめとして滝川氏の説は後方羊蹄と余市とを結びつける爲の附会の説としか思われない。斉明五年紀に「一」と表現されている。滝神を祭つた場所（「一」と表現されている。滝川氏はこれを有向決と解する）は、ともかく津輕・

淳代・館田の何れかの地方であることは明らかである（ここには渡島という表現はないので、渡島が何れの地であるかということには関係がない）。そして肉入籠に至つたというのは事もなくに書かれており、「一」という場所から遠く離れた所のように解せられない。また、後方羊蹄を政所とすべしという蝦夷の進言は肉入籠でなされたものであるから、肉入籠と後方羊蹄とはこれまた遠く離れていないと解さねばなるまい。肉入籠に至つたのは船によつたらしくもない。従つて、後方羊蹄は津輕地方と考へべきである（因みに津田博士はこれをアイヌ語の *ayup* 大河の義で、岩木河から来た名所ではあるまいか、と）。

次に有向決については、斉明四年紀の文章を卒直に読めば、有向決で大饗した時は、征服戦は一段落し、雪船は鰺田浦に碇泊していたのであつて、有向決は碇泊地ではない。従つて、碇泊地の鰺田浦に碇泊しない愚けた漁漁であると考へればよいのであつて、あえてこれを港灣にのみ求める必要はない。また、もし滝川説に従つて有向決を軍船

の碇泊地と假定しても、實際の軍征の面に必ず最適の場所が選ばれたかどうかは疑問で、次善三善の場所を余儀なくされる場合もあり得る。従つて立地条件から地桌を比定することは、参考とはなるが、きめてにはならない。

以上が田名綱氏の反論である。この両論の優劣是非を決することは、私の仕ではなく、またその場所でもない。ただ、この相違は何処から生じたか、という点について若干ふれて置き度い。と申しても、それは遠征の規模を如何様に考へるかという大局観の相違についてではなく、より直接的な斉明四・五年紀の読み方がいかに異なるかを整理して置きたいというに外ならない。念の爲に当該部分を掲げて置こう。

〔斉明四年四月紀〕

阿陪臣綱率船師一百八十艘伐蝦夷。鰐田渟代二郡蝦夷望悉玄降。於是勅軍陣船於鰐田浦。鰐田蝦夷恩荷進而誓曰。不爲官軍故持弓矢。但取等性食肉故持。若爲官軍以儲弓矢、鰐田浦神知矣。

將清白心仕官朝矣。仍賜恩荷以小之上。定渟代津輕二郡及領。茲於有向決召家渡島蝦夷大饗而歸。

〔同五年三月紀〕

遣阿倍臣綱率船師一百八十艘討蝦夷國。阿倍臣簡集館田渟代二郡蝦夷二百廿一人其虜廿一人津輕郡蝦夷一百十二人其虜四人隨振鉏耒廿人於一所而大饗賜祿。即以船一隻与五色綵帛茶被地神。至四月入龍時向於蝦夷膽鹿島定總名二人進曰。可以後方羊蹄屬故所焉。隨膽鹿島等諸遂置郡領而歸。

この中、先づ四年紀については、滝川氏は「遂於有向決」という箇所を頗る重視され、これは秋田能代より進軍して遂に有向決に至つたという意味に解さなければならぬとされる。少くとも滝川氏はどう読取るべきだと主張される訳であるが、しかし、「遂」をそのように読取るのが唯一の途ではないし、「於有向決」とあつても「至有向決」とは見えていないではないかと反論することもある。そこで田名綱氏は「いよいよ最後

に、有向決で「大饗した」という意味に解された。これなら、これは鯛田浦における最後の政治的措施にすぎず、この奥から遂に鯛田浦に於ける軍船の集結は戦闘終了に伴う帰還の爲で、滝川氏の如く更に北上進駐の爲と解する必要はないことになる。要するに滝川氏は鯛田浦の軍船集結を秋田方面における才一段階の軍事行動の終了と更に才二段階の北進の準備、有向決の大饗を北進作戦の結果、と見られるのに対し、田名網氏は鯛田浦の軍船集結を秋田野代方面での軍事行動の結果、有向決の大饗を同地における爾後の政治的措施の終結と見られる訳である。

次に五年紀については、滝川氏は「至肉入籠」を一所、有向決を出帆して肉入籠に至ると解しておられる。これは恐らくその直前の「以船一隻と五色綵帛祭彼地神」を、船一隻を有向決の神に供へて航海の安全を祈った、と理解されることと無縁ではあるまい。しかし、この彼の地の神を祭つたのが航海の安全を祈る爲のものであつたかどうかは分らない。また、假りにそうであつたとしても、その船田が更に北進する爲に祈つたかどうか

はやはり分らない。そこで田名網氏の如く、帰途の航海の安全を祈つたと解してもよいではないかという説も現われよう。と同時に肉入籠への道は海路であつたとのみ解する必要はなく、陸路を取つたとも考えられる。そして陸路とすればこの「一所」と肉入籠または後方羊蹄とさほど離れた処ではないということにもなる。田名網の解釈はほぼこの陸路説である。

要するに滝川氏は、四年紀についても五年紀についても、軍事政治の別なく、ただ比羅夫の海路北進の時間的順序に従つて書紀の記事が書かれていると見ておられる。これに対し、田名網氏は四年紀についても五年紀についても、秋田、野代及び津軽方面の討伐に關する簡略な記載と、それに緒起する同一地方での政治的措施についてのやや詳しい記載、という順序で書紀の記事が書かれていると見ておられる。およそこのように整理することが出来るのではあるまいか。その何れが是か、向題は再び、より精密な書紀の文献批判に帰するよう⁵⁾に思われてならない。